

学校支援ボランティアへの参加のプロセス —参加の深まりがもたらす学校観の変容に着目して—

吉川 浩子

学校経営力高度化コース第12期生

1. 研究の背景と目的

教育を取り巻く問題について語られる時に多く登場する言葉に「学校と地域の連携・協働」がある。なぜ、これほどまでに地域が教育に関わることが重要視されているのだろうか。多くのところで理由として言及されているのが、子ども達の発達において、地域社会で人々と関わることが重要な役割を果たすということである。すなわち、子どもたちを「社会化」する機能を地域社会が有しているということである。この「社会化」の機能が、教育において「地域」が必要とされる重要なポイントである。地域社会で行われている「社会化」のメカニズムについてデューイ¹⁾は「教育とは、経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を高めるように経験を改造ないし再組織することである」と教育活動において子ども達の実験の経験を重要視している。そして、子ども達にとってこの「実験の経験」がなされる場所は地域社会なのである。住田(2001)は「地域社会において、子どもは性と世代を異にし、また同じくする見慣れた他人との社会的相互作用によって、多様な社会化を受け、自我を形成していくのである」²⁾と述べている。子ども達が日常生活を送る場所は家庭、学校、地域社会のいずれかである。これらのうち、家庭も学校も地域社会の中に含まれるものである。したがって、子どもたちにとって経験をすることは地域社会に他ならないのである。

この「学校・家庭・地域の連携」の核となる政策・制度が、学校運営協議会を設置するコミュニティ・スクールである。京都市では、2004年度に初めて学校運営協議会を設置して以降全校設置に向けて取組を推進し、2019年12月時点での学校運営協議会の設置は248校・園である。(幼稚園15、小学校156、中学校61、小中学校(義務教育学校)7、高等学校1、総合支援学校8)幼稚園・小学校・小中学校及び総合支援学校は全校・園設置となっている。京都市の学校運営協議会では、委員として学校運営についての意見や承認をもらうだけでなく、多くの学校で協働活動を担う企画推進委員会を設置し、そこで多くの保護者や地域住民の方々によるボランティアに積極的に参画してもらい「子どもたちのために汗をかく学校の応援団」として地

域に応じた様々な協働活動を実施している³。佐藤（2017）は、コミュニティ・スクールは法的にはスクール・ガバナンスの仕組とされるが、「学校・家庭・地域社会が一体となってより良い教育の実現に取り組む」こと、つまりソーシャル・キャピタルの形成・拡大も期待されることになったとし、コミュニティ・スクールの成果の検証としてスクール・ガバナンスと同時に学校支援などを通じたソーシャル・キャピタル形成による学校改善に関わる実践成果＝「周縁的成果」に注目することも重視されなければならないとしている⁴。では、ここでいわれているソーシャル・キャピタルである学校支援ボランティア活動に参加する人々はどのような過程で学校支援への参加を深めていくのだろうか。本研究では、学校支援ボランティアへの参加者に着目し、彼らがどのような過程で活動に関わり、その参加のプロセスの中でいかなる価値や行動を形成しているのかを描く。

2. 研究の方法と調査対象

2.1 研究の方法

本研究ではA小学校における学校支援ボランティアの活動状況についてのフィールド調査を実施した。調査にあたっては、学校支援ボランティア活動の参加者に20分～30分の半構造化インタビューを行った。また、実際のボランティア活動の具体的な内容や流れを把握するために、ボランティア活動に参加し参与観察を行った。学校側の調査対象者は学校支援ボランティアと直接的なやり取りを行っている校長・教頭・教務主任・管理用務員の4名にインタビューを行った。

2.2 調査対象

調査先

A小学校

調査期間

10月20日～12月13日（インタビュー及び参与観察）

調査対象

① 学校ボランティア 16名（インタビュー調査及び参与観察）

ア 交通安全ボランティア （80代男性2名）

イ 図書ボランティア （30代女性1名）

ウ 読み聞かせボランティア （60代女性1名，30代女性1名）

エ 園芸ボランティア （60代女性2名，70代女性1名，80代男性1名）

- オ エコボランティア (60代女性1名, 60代男性1名)
- カ 環境整備ボランティア (60代女性1名, 60代男性1名)
- キ 校内清掃ボランティア (60代女性3名)

② 教職員 4名 (インタビュー調査)

- ア 校長 (50代男性・在校年数4年目)
- イ 教頭 (40代男性・在校年数2年目)
- ウ 教務主任 (40代男性・在校年数7年目)
- エ 管理用務員 (40代女性・在校年数4年目)

2. 3 A小学校について

本研究の調査対象であるA小学校は、創立150年の歴史をもつ児童数500人余りの中規模校である。閑静な住宅街に立地しており地域に歴史的な史跡がいくつかある、いわゆる落ち着いた学校である。2014年に学校運営協議会が設置されコミュニティ・スクールとなっているが、学校運営委員の実際は地域各種団体の長が担っている。学校支援活動を軸に、その方向性を協議会で議論するという「学校支援型

コミュニティ・スクール」(岩永2011)といえるだろう。A小学校区にはいわゆる自治連合会長は置かれておらず、そういった意味でも学校運営協議会は学校が地域各種団体間を調整する場にもなっている。

表1 A小学校の学校支援ボランティア活動
(令和元年度11月現在)

主催	活動名称	活動頻度	活動主体
学校	交通安全ボランティア	毎朝(登校時間帯)	地域有志
保護者	図書ボランティア 読み聞かせボランティア	月1回 月1回	保護者・OB有志 保護者・OB有志
地域	園芸ボランティア エコボランティア 環境整備ボランティア 校内清掃ボランティア	週1回(毎木曜日) 作業がある場合(年20日程度) 作業がある場合(年15日程度) 月1回(毎月末)	地域有志 地域有志 地域有志 地域有志

現在のところ、学校支援地域本部や

コーディネーターは設置されておらず学校側は教頭・教務主任が中心となって地域との連絡調整係を務めている。現在学校で行われる地域団体主催の行事は年間10回程度あるがどの行事も地域諸団体が主体となって行われており、教職員の参加・協力の範囲は多くなく、管理職が代表して担っている。現在A小学校において継続的に行われている学校支援ボランティアの取組は、表1の通りである。このうち、地域主導で行われている「園芸ボランティア」「エコボランティア」「環境整備ボランティア」「校内清掃ボランティア」の4つについては、ここ2年間に地域住民側の発案により発足したものである。図1は学校と地域連携施策の位置を表したものである⁵。図中のA領域は、学校主導による学校目的のための連携実践を意味し、学校評議員や保護者活用などがある。学校評議員は校長の求めがあつて意見を述べるため、学校主導によ

る仕組みに分けている。B領域は、学校目的ではあるが、地域（家庭）主導で進められる傾向があり、コミュニティ・スクールなど地域代表者等が一定の権限を行使できるなど地域主導性が比較的強い取組が当てはまる。C領域は学校主導で、地域（家庭）目的とする実践で、公開講座などの学校開放や保護者対応、地域奉仕活動などが該当する。D領域は、主に地域（家庭）主導で行われる地域（家庭）目的の実践のことで、学校施設開放や放課後まなび教室などの例が当てはまる。佐藤（2017）は図中のB領域について「地域主導による学校目的活動は教職員に敬遠されやすいが、新しい学校改善にとっては極めて重要な領域の連携になる」⁶としている。図1で示されるように、学校支援ボランティア活動の多くは「学校主導」で行われているが、A小学校の特徴として、学校支援ボランティア活動 8 つのうち6つがこのB領域に該当する「地域（家庭）主導」であるという点に着目したい。

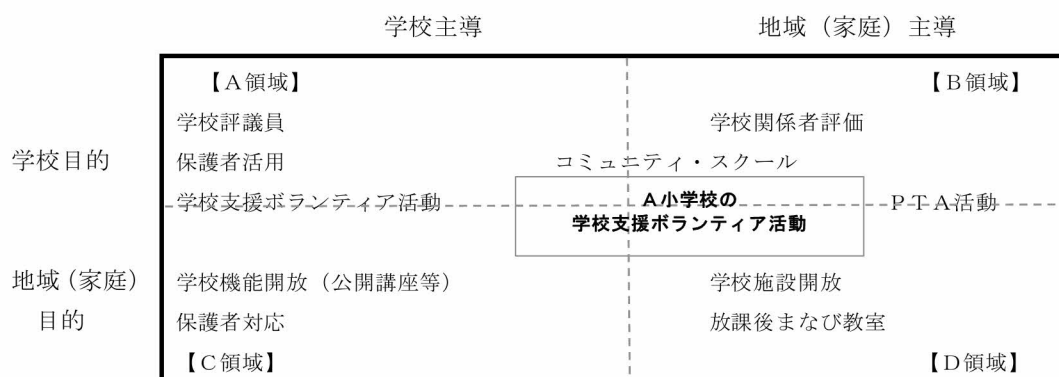


図1. 学校・地域連携施策の位置（佐藤 2017）参考・一部変更 ⁷

3. 研究の結果

まず本研究での「地域」の定義を明らかにしておく。酒川(2004)は、とりわけ小学校が地域住民全体を結びつける役割を果たしてきたことを小学校区内の住民の意識調査から明らかにしている。また、小学校区に地域組織が多く存在し、校区がその地域組織の活動の基本単位であることを指摘している。⁸酒川(2004)は、これらのことを踏まえて「学校は基本的に教育機能を通じて校区住民を結びつけ、世代交代によって更新される自由度を保ちながら、地域社会の拠点として重要な役割を果たしてきた」⁹と結論づけている。学校支援ボランティア参加者へのインタビュー調査の中でも「中学校になると範囲が広がるのでやっぱり小学校へ地域にいる大人が足を運んで」と語られるように、「地域」とは主に小学校区であると捉えられている。ここではA小学校における「地域」はA小学校区と設定する。

分析の結果、学校支援ボランティア参加者がボランティアへの参加を深め、特定の価値や行

動を獲得するプロセスについて、7の категорияと категорияを構成する19の概念が抽出された。7の категорияの内訳は、【Ⅰ. PTA活動や地域団体への参加経験】【Ⅱ. 学校支援ボランティア参加のきっかけ】【Ⅲ. 学校支援ボランティアへの参加の深まり】【Ⅳ. 学校観の変化】【Ⅴ. 学校支援ボランティアの価値への気づき】【Ⅵ. 学校支援ボランティアの課題への気づき】【Ⅶ. 学校支援ボランティアへの参加の深まりがもたらす価値と行動】である。(図2)

図をもとに、調査結果の概要を次のように示すことができる。以下、categoryを【 】, 概念を[]で示す。

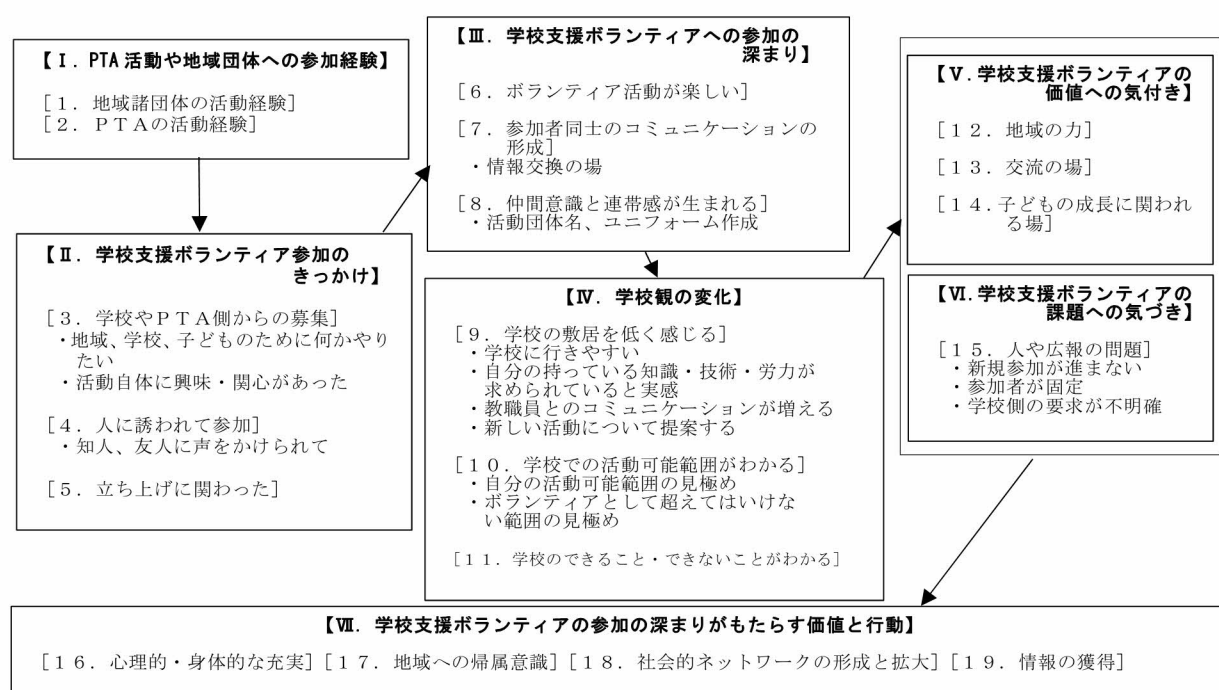


図2 学校支援ボランティアへの参加のプロセス

3. 1 PTA活動や地域団体への参加経験

まず、学校支援ボランティア参加者は地域社会の中でどのように過ごしているのか。背景として参加者がボランティア活動を始める前の経験に着目したい。共通するのは、[1. 地域諸団体の活動経験][2. PTAの活動経験]である。いずれの場合も積極的に立候補したわけではなく、どちらかという断り切れずに役職を引き受けている。地域諸団体の活動やPTAの活動などで過去に地域貢献・学校貢献活動に関わったという経験がベースになっている。つまり、そのつながりの強弱はあるが、以前からある程度、地域の社会的ネットワークに参加している人々が参加者となる。

「事例1. あんたしない？って言われて。してくれんか？て言うんですね。で、えーいやー私断ったらまた人

に電話せんなんな一って。まあ、地域委員ぐらいやったらやらせていただくわちゅって。」

3. 2 学校支援ボランティア参加へのきっかけ

このような背景のもとで、学校支援ボランティア参加者は大きく3つの誘因で学校に関わりはじめる。1つめは、学校やPTA側からの募集が参加のきっかけになる場合である。「交通安全ボランティア」「放課後まなび教室」「図書ボランティア」「読み聞かせボランティア」などがこれにあたる。以前から「地域・学校・子どものために何かしたい」と考えていたが、ちょうどよいタイミングで募集がかかったというのがきっかけである。ボランティアの活動自体に関心をもって参加するというものであるが、「何かをやりたい」という思いはありつつも、必ずしもボランティアの内容に興味・関心をもっているわけではない場合もある。「できそうだから」「楽しそうだから」といった抽象的な思いをもって参加しようとすることも含まれている。

2つめは、人に誘われた場合である。特に地域主導のボランティア活動である「園芸ボランティア」「エコボランティア」「校内清掃ボランティア」「環境整備ボランティア」は募集をかけていないため発案者以外の参加者は全て声を掛けられたことが参加のきっかけであった。この場合、改まった場での誘いではなく会話の流れの中で声を掛けていることがわかる。

「事例5. 郵便ポストを出しに、はがきをポストに出しに行って通りかかったら『よかったらやって』みたいに。声かけてもらえと行きやすいですね。私は声かけてもらって行きだしたから。」

「事例6. 昔からの馴染みやってね、どこ行くんやっていってね、小学校の掃除してるんや清掃してるんやってね、ほんならわしも参加さしてもらおうわって言ってね。」

3つめは活動の立ち上げに関わり、そのまま活動に継続参加していく場合である。読み聞かせボランティアの場合は、PTA役員の際の「こんなことできたらいいな」という会員の声を学校長に届けたことがきっかけで始まっており、話を繋いだ当人は活動にそれほど思い入れはなかったがそのまま継続参加に至っている。

3. 3 学校支援ボランティア活動への参加の深まり

①ボランティア活動が楽しくなる

学校支援ボランティアの参加者たちは、ボランティアに参加することを「楽しい」経験として意味づけている。では、学校支援ボランティアに参加することの「楽しさ」とは何か。

1つは、子どもとの交流である。どれも深い関わりではないが、挨拶をしてくれる・一緒に活動する・「おもしろかった」と言ってくれる子ども達の反応などが楽しみとなっている。子ど

も達と直接関わりのないボランティアにおいては、学校に来て運動会や学習発表会の練習の様子を見聞きすることで子ども達の様子を感じられることが楽しいと語っている。

2つめは、ボランティアの活動自体に楽しみを見いだしていることである。その活動自体が自分にとって楽しいかどうか活動の継続につながっている。また、ボランティア活動で行う仕事の成果が高度な専門性を求められているわけではないことも「楽しさ」の誘因となっている。

「事例4. みんなにも会えるしきれいになるしやりたいところがいっぱいあったりとかして目につくから。うん次はあそこ次はあそこみたいな。なんか時間を忘れるみたいな。」

「事例8. これがしんどかったら別にせんでもええことやからな。やっぱり好きやから遊びやからやれるんやろうなあ。」

②参加者同士のコミュニケーションの形成

つぎにボランティア参加者同士の交流がある。活動についての話し合い以外にも自分とは年代の違う参加者との「情報交換の場」としての機能も大きい。特に読み聞かせボランティアは、自分の子どもが卒業してからも活動を続けるOB参加者も多く、子育ての先輩としての話を聞けることを楽しみにもしている。

「事例7. OBさんだったらすごく年上だし、お子さんが社会人とかの方もいらっしゃるじゃないですか。じゃあやっぱりいろいろ聞けますよね。自分の子の成長のことを。中学高校のこともそうだし。同じような年代の方たちの話もあるし、それプラス子どもが来てなんか喜んでたらなんかいいことだけですよ。」

また、活動ボランティアの名前（ニックネーム）を決めたり、ネームが印刷された揃いのエプロンを作ったりしているボランティアもあり、参加者同士の仲間意識と連帯感を深めている様子が伺われる。

3. 4 学校観の変化

このようにボランティア参加者がボランティアへの参加を深めるプロセスにおいて中心的な役割を担っているのが【Ⅳ. 学校観の変化】である。

ボランティア参加者は活動に主体的に関わるようになるにつれ、[9. 学校の敷居を低く感じる]ようになる。「敷居」という表現は、1つには「学校という場所に対する入りにくさ」を表している。これは、来校目的がはっきりしていることや来校頻度が高くなるにつれて「学校

に行きやすい」と変化している。

「事例5. やっぱ子ども卒業してもうかなり年数経ってくるとやっぱり後、気にはなるけども中まで入ってくるっていうことはあんまりなかったから。機会が全くなくなるっていう。」

また、学校を「教育を行う場」と捉えており、ボランティアとして入る際に教育的な振る舞いを求められるのではないかと不安も数居の高さとして語られていたが「ボランティア」という役割がはっきりしていることで、活動を通して教育の専門性ではなく自分の持っている知識・技術や労力こそが求められていると実感している。さらに地域・家庭から新しい活動を提案するという行為への難しさも「数居が高い」と表現しているが、学校支援ボランティアを通して教職員とのコミュニケーションが増えることが、何気ない会話の中で新しい活動について話すことにつながったと振り返っている。

そして「10. 学校での活動可能範囲がわかる」ようになる。これには2種類あり、1つはボランティアとしてここまでなら自分ができそうであるという自分の活動可能範囲の見極めであり、もう1つはボランティアとして超えてはいけない範囲の見極めである。

さらに「11. 学校のできること・できないことがわかる」ようになると語られている。

「事例1. そら当たり前のとこなんですけどね。ここから超えてはいかんというその一お約束みたいなんですかね。そら何をしてもいいっていうことでは決してないと思うんで。そこはやっぱり場所が学校だけに。」

「事例2. 一番最初、なんか数居みたいな。一步一步、なんか自分もここまでしていいんだ、ここまでできるんだっていうね、それがなんかね、うん。」

「事例7. もう学校に全て任せますじゃないけどそういう感じもあるじゃないですか他にも。でもやっぱちょっと中に入ると学校っていてもここまでしかできないこともあるっていうのが見えるっていうのもあると思うんです。」

3. 5 学校支援ボランティアの価値への気づき

こうした【IV. 学校観の変化】は、学校支援ボランティアをどのような価値をもつものとして認識する方向で作用するのか。地域における学校支援ボランティアの価値への気づきは大きく次の3点で形成・再形成される。1つは、学校支援ボランティアを「12. 地域の力」であると捉え直すようになる。ボランティア参加者は活動を始める前から、地域住民や保護者が学校・子ども達に関わることを正の効果を持つものと考えている。「地域のために」「子ども達のために」という言葉からもわかるように、「何をする」ではなく「関わること」が良いことであると考えている。そして実際に活動する中で、自分の活動が子ども達や学校の「役に立っている」

と実感していく。それを自分個人の力というよりは「地域の力」とであると捉えている。2 つめは、学校が地域住民の社会参加の機能をもつ [13. 交流の場] であるという捉えである。「参加者同士のコミュニケーションの形成」でも述べたように、学校支援ボランティアとして学校に来ることで出会う人々との交流に価値を見出している。そして 3 つめは、[14. 子どもの成長に関わることができる場] としての捉えである。家庭で保護者として我が子の成長に関わるのはもちろんであるが、学校支援ボランティアを通して我が子以外の成長にも直接的・間接的に関わることができる。子どもが在学していない地域住民という立場からは、地域の子どもの成長に関わる機会や場所として学校という存在が必要だと語られている。

3. 6 学校支援ボランティアの課題への気づき

学校支援ボランティアへの参加が進み、学校に対する理解が深まってくるにつれて、学校支援ボランティアの課題についての気づきが形成されるようになる。[15. 人や広報の問題] である。具体的には、新規参加がそれほど進んでおらず、活動する人が固定化していることが認識されるようになる。また、ボランティア参加者がそうであったように、実際に活動して初めてその価値に気付くようになるにもかかわらず、参加者が増えないことを残念に思う気持ちが形成されるようになる。また、学校側からのアナウンスが少ないことも指摘されている。「地域には腕のある人がたくさんいて宝物が埋まっている」と語る一方で、「何をしてほしいのか学校側の要求が明確にされていないから学校支援が広がらない」と語られていた。

事例 1. 「だんだんと動かれる方が決まってきそうになるのはまあ仕方ないことかもしれませんが、あの…そういうものにご興味の無い方は初めからタッチもされませんしね。そりゃ仕方ないって言えば仕方ないですけどね。」

3. 7 学校支援ボランティアが育む価値と行動

①心理的・身体的な充実

このような学校支援ボランティアへの参加の深まりは、参加者にいくつかの価値観と行動を創発している。1 つは [16. 心理的・身体的な充実] である。これは、学校支援ボランティアに参加し子どもと直接的・間接的に関わったり、参加者同士が交流することによって、参加者が「楽しく」「元気に」なることができたり、「生活にリズム」ができるようになったりすることである。

②地域への帰属意識の高まり

学校支援ボランティアへの参加が深まるにつれ、[17. 地域への帰属意識] も高まる。地域の子ども達に関わっているという「地域貢献」の意識が「自分が地域の一員である」という思いにつながっている。

③社会的ネットワークの形成と広がり

学校支援ボランティアへの参加は、同じ地域の住民が集まり、出会い、新しい関係性が生まれる場ともいえるだろう。「人に誘われて」参加が始まる場合でも、参加者全員が元々の知り合いだったわけではなく、知り合いの知り合いという関係から一緒に活動する仲間へととなっている。また、単に知らなかった地域の人に出会うだけでなく、世間話をしたり相談をしたりする関係へと変化している。

④情報の獲得

これは学校支援ボランティアの活動を通して、その活動に関する知識を獲得することができるということに加え、参加者間の相互行為の中で行われる身の回りの生活や地域に関する情報交換も重視しているということである。また、学校の様子（教育、行事、教職員など）について学校に来ることによってわかる情報にも価値を見いだしている。

事例1. 「ちょっといっぺん来てみられると普段見られないことが見えてくるし。こんなことやったかってわかることもあるので。で、もうなんていうか肌で感じる？学校の雰囲気が。」

事例7. 「学校の忙しいっていうか、このぐらいまでしか、限度だよっていうことがわかるっていうのはあるかもしれない。やっぱ中にちょっと入ると学校っていてもここまでしかできないこともあるっていうのが見えるっていうのもあると思うんです。」

4. 考察

本研究は、学校支援ボランティア活動において、ボランティア参加者がどのような過程で学校支援ボランティアへの参加を深めていくのか、その過程でどのような価値や行動を創発するのかを明らかにするものである。その結果、学校支援ボランティア参加者は、[ボランティア活動の楽しさ]、[参加者同士のコミュニケーション]、[仲間意識と連帯感] などをとおして、学校支援ボランティアへの参加を深めていた。これらの参加の深まりを経て【学校観】が変容する。この【学校観】の変容が、ボランティア参加者の特定の【価値観や行動】を創発していた。

こうした学校支援ボランティアへの参加をとおして創発される【価値観や行動】として、本研究は次の4つを明らかにした。[心理的・身体的充実]、[地域への帰属意識の高まり]、[社会的ネットワークの形成と広がり]、[情報の獲得]である。この4つは「社会関係資本」＝ソー

シャル・キャピタルに相当するものであるといえるだろう。

次に、本研究の結果得られた知見を3点挙げたい。

第一に、地域社会において学校支援ボランティア活動がどのような社会的意味をもつのかという点である。本研究は、学校支援ボランティア活動が地域住民の関係性や行動を発展させる力をもつことを確認した。このことは、学校支援ボランティア活動が「地域づくり」に結びつくということを示していると考えられる。例えばインタビューからみえてきたのは、学校支援ボランティアが新しいネットワークの場になっているということである。さらに今回の調査は、参加者の地域への帰属意識が高まり、社会的ネットワークの広がりの中で行動が創発されていくことを示唆している。

第二に、学校ボランティア活動において参加を深めていく過程を明らかにできたことである。ここでいう「参加の深まり」とは、学校支援ボランティアへ十全的に参加していく過程を意味している。学校支援ボランティアの成員としてのアイデンティティを深め、他の参加者と相互作用を重ねながら、学校支援に実質的に関わっていく過程を意味している。本研究は、この十全的参加の過程において、【学校観の変化】が鍵を握ることを示すことができたと考える。

第三に、ではどのようにしてこの学校観が変容していくのかということである。1つめに、「楽しみ」をもって関わるのが重要だということである。今回明らかになったのは、参加者は「楽しみ」のある活動のなかで、知らず知らずのうちに学校観を学んでいたということである。2つめに、学校観が変容する過程においては、学校支援ボランティア活動に「持続的に」関わるのが重要だということである。単発で参加しただけでは学校観は変化しない。学校に何度も足を運び活動する中で、「学校の敷居」が低くなっていく。

また本研究から示唆される今後の課題として次の3点がある。第一に、本研究は学校支援ボランティアへの参加の深まりに焦点をあてて行った。しかし「参加の深まり」と「学校支援ボランティアの発達」は必ずしも相関するものではない。つまり今回の調査は地域住民個人の参加に焦点をあてた一方で、学校支援ボランティア活動それ自体の変容について分析したわけではない。学校支援ボランティア活動自体を調査していくことが今後必要であるだろう。

第二に、参加者の年齢階層に注目した分析も必要となるだろう。本調査では、調査協力者16名のうち15名が60代以上であった。ボランティアという性質上、時間のある高齢者に活動が偏ると考えられるが、30代40代の若い世代の参加者であれば違った学校観の変容がみられると考える。固定化しつつある活動メンバーの輪を広げていく手掛かりとなるだろう。

第三に、本研究は学校観の変容が参加者の参加の深まりや社会関係資本形成の鍵となること

を示唆しているが、この学校観は学校支援ボランティアの具体的な活動のなかで、参加者が「楽しく」「持続的に」関わる時に変容していた。つまり、学校にとって「楽しさ」と「持続性」をどのように考えるかが学校支援ボランティア活動の今後につながるのではないだろうか。

引用文献・参考文献

- ・ 岩永定（2000）「父母・住民の学校教育参加と学校の自律性」日本教育経営学会編『自律的学校経営と教育経営』（シリーズ教育の経営 2）玉川大学出版部。
- ・ 酒川茂（2004）『地域社会における学校の拠点性』古今書院。
- ・ 佐藤晴雄・望月厚志・柴田彩千子（2013）『[講座現代学校教育の高度化 6] 生涯学習と学習社会の創造』学文社。
- ・ 佐藤晴雄（2017）「コミュニティ・スクールの成果と展望—スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割—」ミネルヴァ書房。
- ・ 住田正樹（2001）『地域社会と教育—子どもの発達と地域社会—』九州大学出版会。
- ・ デューイ、松野安男訳（1975）『民主主義と教育』岩波書店 *Democracy and education*（訳本）。
- ・ デューイ、宮原誠一訳（1957）『学校と社会』岩波書店 *The school and society*（訳本）。

¹ デューイ、松野安男訳（1975）『民主主義と教育』p. 127

² 住田正樹（2001）『地域社会と教育—子どもの発達と地域社会—』p. 58

³ 京都市教育委員会ホームページ 学校運営協議会『「京都方式」の学校運営協議会』
更新日：2020年1月6日 <https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000038884.html>
(2020. 1. 6 入手)

⁴ 佐藤晴雄（2017）「コミュニティ・スクールの成果と展望—スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割—」p. 113.

⁵ 佐藤晴雄（2017）「コミュニティ・スクールの成果と展望—スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割—」p. 115.

⁶ 佐藤晴雄（2017）「コミュニティ・スクールの成果と展望—スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割—」p. 116.

⁷ 佐藤晴雄（2017）「コミュニティ・スクールの成果と展望—スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割—」p. 115.

⁸ 酒川茂（2004）『地域社会における学校の拠点性』pp. 99-100

⁹ 酒川茂（2004）『地域社会における学校の拠点性』p. 277